

東京工業大学 教育革新シンポジウム
未来社会の柱となる博士学生の育成を目指して

大学院生対象の
段階的な大学教員養成機能に関する考察
－米国研究大学から日本への示唆－

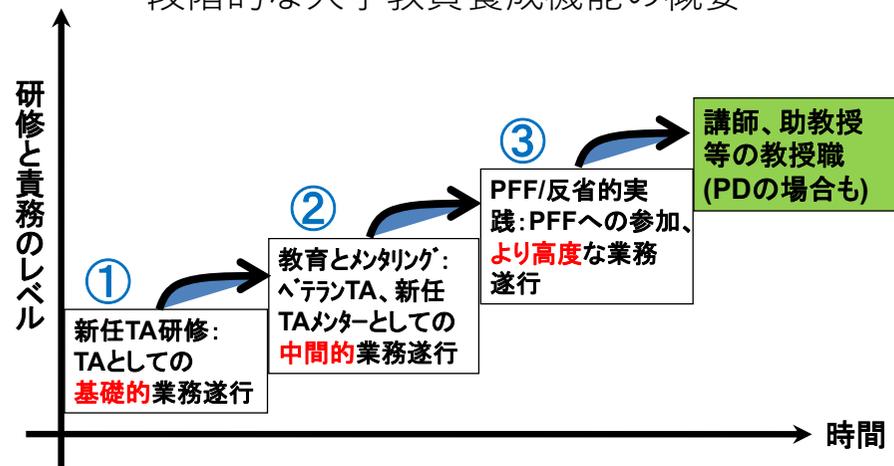
吉良 直
東洋大学 文学部教育学科
2023年1月26日(木)

1

はじめに－発表の概要

- シンポジウムの趣旨を受けて、日本のプレFDのモデルとなった米国研究大学におけるPFFと段階的な大学教員養成機能について概説
- 発表の内容
 1. TA制度とTA研修の発展の背景と概要、並びにベテランTAのメンターとしての業務
 2. 将来の大学教員準備（PFF）プログラムの発展の背景と概要
 3. 日本への示唆
- 日米の制度が大きく異なることを指摘
－特に米国のTAが実質的な教歴を積んでいること、

研究大学における大学院生のための
段階的な大学教員養成機能の概要



吉良直（2014）の図1（p. 11）をもとに作成.

3

1. TA制度の概要と発展の背景 TAが多用されている現状

- 「大学院生のTAは、研究大学と総合大学の学部レベルの科目の約40%で指導を担当し、1、2年用の入門科目では約60%で指導を担当する責務を担っている」（Marincovich, et al., 1998, p.xvii）
 - －TAは、博士号授与/研究大学と修士号授与大学に集中（学士課程だけでなく、博士・修士課程も提供する大学）
 - －米国の大学のTA制度は、規模が大きく、大学主導・学部主導で運用

4

TA制度発展の背景 研究業績偏重の時代

- **1960年代**：学部学生数が急増し、大学教授の需要が増大し、**TA制度が拡大** → その背景
 - 大学院生を増やすための**財政支援策**
 - 教授の**教育負担軽減**と**授業担当者確保**のための有効策
- **1960～70年代**：TAの多用が学士課程教育の**質的低下**の原因として問題視（大学紛争等）
 - 十分に訓練されていない**TAが多用**される傾向
 - 奨学金や研究助手（RA）のポジションが獲得できない「**より劣る**大学院生がTAになる傾向」（荻谷、1992）

5

TA研修発展の経緯（質的低下を受けて） 研究業績偏重 → **教育業績も重視**する時代へ

- **1970年代**：問題への対策として、TA研修が主に**学部レベル**で徐々に普及
- **1980年代後半～**：多くの大学に教授学習センター（CTL）が開設され、TAの質的向上のための**全学的プログラム**が普及
- **1990年代～**：TAを単なる一時的な授業担当者としてではなく、**将来の大学教員**と見なして養成する大学教員準備（PFF）プログラムなどが全米で組織的に支援され普及

6

高等教育界に教育重視の流れを作った主な要因

1. **学部学生層の変化**：人種・所得・年齢等に関して多様な学生層増加への対応
2. **アカウンタビリティを求める市民の要求**：授業料高騰が続く中で教授・学習効果への結果責任の要求増大（K-12改革の流れも影響）
3. **新しい教授・学習テクノロジー導入への期待**：様々なテクノロジーの導入による教授・学習過程改善の可能性の増大

Huber & Morreale (2002)

7

TA制度の概要 — 運用制度

- **身分**：博士課程/修士課程に在籍する大学院生が標準
- **名称**：Teaching Assistant (TA)に加え、Graduate Student Instructor (GSI)、Teaching Fellow (TF)など多数（すべて同じ名称の場合、業務の難易度等により名称が異なる場合も）
- **業務内容**：①人文・社会科学系の**討論クラス**・自然科学系の**実験クラス**の**指導**、②採点・成績評価の手伝い、③試験問題作成、④オフィスアワーでの質疑応答など
→さらに、主に語学系入門科目で単独での**指導・評価**、Lead TAとして、新任TAへの助言・指導等
- **勤務時間と報酬**：週20時間の標準的雇用に対して、授業料免除と手当（2セメで1, 2万ドル程度）

8

- ① TA研修 = **全学的**制度(Campus-wide) (1)
Center for Teaching and Learning(CTL)が主導
①Event Coordination, ②Consultation, ③Information

- 学期初めに開催される**新任TA用オリエンテーション (Event Coordination)**
 - 半日、1日のものから2週間のものまで多様
 - 全体会と分科会で構成される場合が多い
- 学期中に開催される教授法などに関する**セミナー、ワークショップ (E.C.)**
 - 内容は、参加型教授学習法、人種的多様性の尊重、シラバスの書き方、ティーチング・ポートフォリオの書き方等多岐にわたる

9

全学的制度(Campus-wide) (2)

- **マイクロ・ティーチング**(Microteaching)、授業録画などを通しての希望するTAへの個別指導、Mid-term Feedbackなど (**Consultation**)
- TA用ハンドブック、ニュースレター、ビデオ等の作成・配布によるさまざまなトピックに関する情報提供、CTLのホームページでの**情報提供**など (**Information**)

10

各学問分野の制度(Departmental) 学部・研究科が主導

- **学問分野に特化した訓練**(by Departments)
 - 学期初めに開催される新任TA用**研修** (全学のものに加えての実施と、代わりに実施の場合あり)
 - 学期中開講の各学問分野に特有な**教授法、教育内容**などに関する**単位認定科目** (大学院課程の単位になる場合も)
- **講義科目に特有な訓練**(by Professors)
 - TAが補助する科目の担当教授による学期前、学期中の**指導、指示、監督、評価** (各教授の裁量に任されているため、内容は多様)
 - 受講生数が多く、TAの人数が多い場合、**TA経験者**が新任TAを**指導**する体制確立

11

TA経験者の見解 – スタンフォード大学の事例

- **長所**
 - 学生との交流 (知的コミュニケーション、学生の成長を見られること)
 - 教育活動 (教えること自体の喜び)
 - 学問分野の理解の深化 (教えることで学びが深まっている)
- **短所**
 - 採点や日常的な業務 (退屈で創造的でない、十分な時間が確保されていない)
 - 難しい学生への対応 (成績への不満、やる気のない学生)
- **要望**
 - 技術訓練機会の充実 (パブリック・スピーキング法、採点方法、実験・討論クラスの運営方法等)

12

②

教育とメンタリング 中間的業務遂行

- TA業務を一定期間遂行した後、希望し選抜されると、**Lead TA、GSM**などに昇格
- Lead TA、GSMなどの**ベテランTA**としての業務
 - 全学的、各学問分野のTA研修の**企画・運営**
 - 新任TAのメンターとして**指導・助言**、さらに中間フィードバックを実施する場合も
 - TAのまとめ役
- TA間のメンタリングなどにより、**効果的な教え合い**があり、CTLスタッフの業務の高度化に貢献
- 担当分野の**学問的知識、指導技術**に加え、プレゼンテーション、コミュニケーションなどの**汎用的スキル**も習得

13

③

2. 大学教員準備プログラム (Preparing Future Faculty, **PFF**)

- **期間と主催**：1993年から2002年の期間に、大学院協議会（CGS）とアメリカ大学協会（AAC&U）の共催で、**ナショナル・プログラム**を実施
- **財源**：ピュー・チャリタブル・トラスト、全米科学財団（NSF）等の財政支援により実現
- **目的**：将来大学教授職をめざす大学院生に、**教育、研究、サービス**からなる大学教授の役割と責任を認識させ、**教授職への準備**を支援することを通して、大学教育の**質的向上**を図ること

14

PFF実施の背景

- 博士号授与・研究大学と博士号取得者を雇用する大学の状況やニーズとの**ミスマッチの解消**
 - 「**僅か102の研究大学が、博士号の8割を授与しているが、ほとんどの大学教授職があるのは、組織目標も学生層も教授の役割も大きく異なる他の3,000余りの機関**」（Tice, et al., 1998, p.278）
- 研究大学における研究能力偏重、**教育能力軽視**の大学院教育への**反省** ⇒ **組織文化の変革**急務
- カーネギー財団のボイヤー会長が、**教育の学識**（Scholarship of Teaching）を**研究**（発見と統合）や**サービス**（統合と応用）の**学識**と同等と位置づけることを提唱（Boyer, 1990）

15

PFFの特徴

1. **クラスター(clusters)の形成**
 - 博士号授与機関（研究大学）が各種の大学と**クラスター**を形成し、**パートナー大学**（修士号授与大学、リベラルアーツ・カレッジ、コミュニティ・カレッジなど）に出向き、大学教授職の詳細を実践的に学ぶ形態
2. **大学教授の役割と責任の全体像の提示**
 - **研究、教育、サービス**のすべてを重視
3. **複数のメンター(multiple mentors)による指導**
 - 従来の**研究力養成のためのメンター**に加えて、**教育・サービス**活動に関する**メンター**の確保

16

全米PFFの実施体制の詳細

段階、年	目的	資金源	参加機関
第1段階 (1993-1997)	モデルとなるプログラムの開発	ピュー・チャリタブル・トラスト	17クラスター
第2段階 (1997-2000)	プログラムの制度化と拡大	ピュー・チャリタブル・トラスト	15クラスター
第3段階 (1998-2000)	自然科学、数学分野でのモデルプログラムの開発	全米科学財団 (NSF)	20の学部・研究科とクラスター
第4段階 (1999-2002)	人文・社会科学分野でのモデルプログラムの開発	アトランティック・フィランソロピー	24の学部・研究科とクラスター

17

PFFの実績、波及効果

- 76の助成金支給：44の研究大学とクラスターを構成する339のパートナー大学、11の学協会が受領
- 参加学生：大学院生約4,000人が参加
- 助成金：10年間の総額は690万ドル
- 効果：
 - ① 大学教授の役割への理解と大学教授職に対する興味^{の深まり}
 - ② 多様な大学組織の認識^{の拡大}
 - ③ 労働市場で競争する能力^{の向上}（TP作成など）
- 波及効果：N.P.不参加の大学でも必要性が認識され独自のPFF活動が普及 → 多様な形態で実施

Goldsmith (2004)

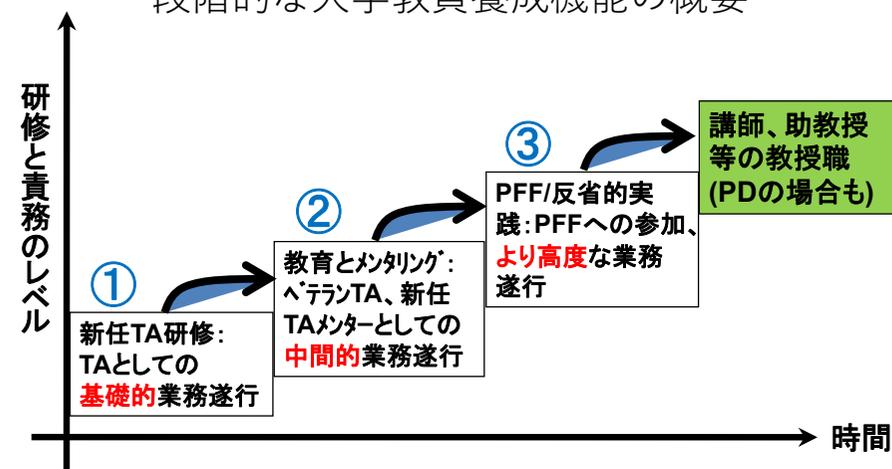
18

PFFの現状と課題

- PFFは、各大学や学協会が多様な形態で実施
 - 大学では、CTL、学部・学科などが主催（参加者の選抜がある場合も）
 - 学会では、年次大会のプレ・ワークショップとして実施する場合も
- 主要な内容：①高等教育界、教授職の理解を深める講義、②TP作成・学術論文作成の支援、③クラスター制に基づく大学訪問やシンポジウム、④人種的多様性の尊重など
- 米国研究大学で教授職に就くためには、厳格なテニュア取得のための審査があるため、教授職を目指す学生にとってPFFは重要
- 課題：研究大学では、研究業績重視となっているので、PFFなどの支援にも大学間、学部間の格差

19

研究大学における大学院生のための段階的な大学教員養成機能の概要



吉良直 (2014) の図1 (p. 11) をもとに作成.

20

3. 日本への示唆 – 日米比較から

	アメリカ	日本
各セメの 受講科目	・4~5科目受講、各科目につき講義とTAセクション	・8~12科目受講、ほとんどは週1回の90分講義のみ
TA制度と TA研修	・TAは、20名程のTAセクションの指導から入門科目の成績評価も含む指導の責務を担う ・学期初めのTA研修は、数日のものから3週間のものまで	・TAは、実験・実習・演習の補助業務に限定され、実質的な教歴は積めず ・業務が限定的なので、研修も限定的
PFF/ プレFD	・TAで教歴を積み、TA研修の運営やメンター経験を積んだ上で、PFFに参加。教育経験を省察し多様な大学教授職への準備 → 段階的な養成機能	・教歴がほぼないので、米国のTA研修とPFFが混ざったような プレFD に参加（その中でマイクロティーチングなどで僅かながら教育経験を積む） → 養成機能は段階的ではない
CTL	・各大学にCTLが設置され、多様なサービスを提供	・CTL設置が、国立大や一部の私立大に限定

21

日本への示唆のまとめ

- ・ **米国**研究大学のTAは、**実質的な教育経験**を積んでいるが、**日本**では**限定的**である状況で、プレFDの努力義務化にどう対応するか
- ・ **教育力向上**の機会確保：①学部生の指導補助、ディスカッションの指導など → **本日GSA制度**@東工大
②プレFDでのシラバス作成、マイクロティーチング（模擬授業）などの導入 → **本日熊本大学**の事例
- ・ **TA業務の高度化**：より高度な教育業務の遂行を可能にする制度 → **TF制度**の導入（北大、広大、大阪大などの例）（+ 非常勤講師としての経験）
- ・ **大学教授職の公募**：「教育経験と教育活動への抱負」の提出 → ティーチング・ステートメント（**TS=TPの簡略版**）の作成支援の必要性（吉良他、2019）

参考文献

- ・ 近田政博 (2007) 「研究大学の院生を対象とする大学教授法研修のあり方」『名古屋高等教育研究』7巻、147-167.
- ・ 近田政博 (2021) 「大学院生の教育能力形成に関する課題－プレFD実施大学への聞き取り調査を中心に」『大学教育研究』29巻、73-86.
- ・ 苅谷剛彦 (1992) 『アメリカの大学、ニッポンの大学－T A・シラバス・授業評価』玉川大学出版部.
- ・ 北野秋男 (2006) 『日本のティーチング・アシスタント制度－大学教育の改善と人的資源の活用』東信堂.
- ・ 吉良直 (2008) 「アメリカの大学におけるT A養成制度と大学教員準備プログラムの現状と課題」『名古屋高等教育研究』第8号、193-215.
- ・ 吉良直 (2010) 「米国のCASTLプログラムに関する研究－3教授の実践の比較考察からの示唆」『名古屋高等教育研究』第10号、97-116.
- ・ 吉良直 (2014) 「大学院生のための段階的な大学教員養成機能に関する研究－アメリカの研究大学から日本への示唆－」『教育総合研究』日本教育大学院大学紀要第7号、1-20.
- ・ 吉良直 (2016) 「米国研究大学における学習評価能力養成を目指す大学教員準備プログラムの展開」大学教育学会第38回大会、自由研究発表、立命館大学、6月12日.
- ・ 吉良直・栗田佳代子・吉田壘 (2019) 「米国研究大学における大学院生対象のティーチング・ポートフォリオ/ステートメント作成支援に関する研究－日本への示唆」『東洋大学文学部紀要 教育学科編』72(44) 1-8.
- ・ 栗田佳代子 (2020) 「大学院生のための教育研修の現状と課題」『教育心理学年報』59号、191-208.
- ・ 今野文子 (2016) 「大学院生を対象とした大学教員養成プログラム（プレFD）の動向と東北大学における取組み」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』2号、61-74.
- ・ 田口真奈・出口康夫・赤嶺宏介・半澤礼之・松下佳代 (2010) 「未来のファカルティをどう育てるか－京都大学文学部研究科プレFDプロジェクトの試みを通じて」『京都大学高等教育研究』第16号、91-111.

References

- ・ Boyer, E.L. (1990) *Scholarship Reconsidered: Priorities of the Professoriate*. Princeton, NJ: The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching.
- ・ Gaff, J.G., Pruitt-Logan, A.S., Weibl, R., and associates. (2000). *Building the Faculty We Need: Colleges and Universities Working Together*. Washington, DC: Association of American Colleges and Universities.
- ・ Goldsmith, S.S., et al. (2004). *Preparing Future Faculty Initiative: Final Evaluation Report*. WestEd Evaluation Research Program and Abt Associates Inc.
- ・ Huber, M.T., & Morreale, S.P. (Eds.). (2002). *Disciplinary Styles in the Scholarship of Teaching and Learning: Exploring the Common Ground*. Washington, D.C.: AAHE & The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching.
- ・ Lambert, L.M., & Tice, S.L. (1993). *Preparing Graduate Students to Teach: A Guide to Programs that Improve Undergraduate Education and Develop Tomorrow's Faculty*. Washington, DC: American Association for Higher Education.
- ・ Marincovich, M., Prostko, J., & Stout, F. (Eds.). (1998). *The Professional Development of Graduate Teaching Assistants*. Bolton, MA: Anker Publishing Company, Inc.
- ・ Seldin, P. (2004). *The Teaching Portfolio: A Practical Guide to Improved Performance and Promotion/Tenure Decisions* (3rd Edition). Bolton, MA: Anker Publishing Company, Inc.
- ・ Tice, S.L., Gaff, J.G., Pruitt-Logan, A.S. (1998). *Preparing Future Faculty Programs: Beyond TA Development* (pp. 275-292). In Marincovich, M., et al. (Eds.), *The Professional Development of Graduate Teaching Assistants*. Bolton, MA: Anker Publishing Company, Inc.
- ・ Wulff, D.H., Austin, A.E., & associates. (2004). *Paths to the Professoriate: Strategies for Enriching the Preparation of Future Faculty*. San Francisco: Jossey-Bass.